

— 第百拾参号 —

こんな人が来ました。

あきびんご様

3年前の夏以来久々に来窯されました。すくい易いマグカップにいつものユニークな筆さばきや注射器さばきで自由奔放に絵付けをされました。汚れないように新聞紙を敷いて素焼きを並べ一気に筆や注射器を走らせ、今まで見た事もない線や濃みで表現されます。草木であったり動物であったり、ひとつとして同じ絵はありません。あきびんご先生は、絵本作家ですが、戴いた「したのどうぶつえん」の裏表紙からその経歴をひもといてみます。

1948年広島県尾道市生まれ。東京芸術大学日本画卒。絵画や染付などの個展活動も行っている。また幼児教育の研究者でもあり、さまざまな教材、教育、文具の開発をした。著書に、村上潔の名で「北風ママと太陽ママ」「太陽ママになろう」(以上 PHP 研究所)がある。絵本は本書が初めての作品。

3年ぶりの再会でしたので工房の職人さんたちを集めて、約20分間講話をして戴きました。突然のお願いにも拘らず即引き受けて下さり、染付製作の手を休んであきびんごの世界の一端を紹介して戴きました。何ごとにもとらわれず「非まじめ」に真剣に取り組んでおられる姿が、新鮮で、職人さん達も思わず肩の力を抜いて先生の話に聞き入っておられました。

有田には様々なユニークな人達が集まって来ます。これからも人材は宝であり財産です。有田の元気を取り戻す為にどのように生かすかは私達有田もんの感性とやる気次第です。新潟県糸魚川市の糸魚川市長さんは絵本で町おこしをしたいとまじめにおっしゃったそうです。有田はやきもので400年もメジャーであり続けたので町おこしの精神を失いかけていたのかもわかりません。糸魚川市長さんの心意気に強く心を打たれました。是非成功して欲しいと思いました。



武雄市役所訪問

7月6日(水)私の誕生日に武雄市長樋渡啓祐様に会いに行きました。町議の井手哲君の発案で樋渡市長を指名して戴きました。私がアポをとって、有田側から井手町議、徳永隆信君、高橋さん、しん窯大敬君と私の5人で大雨の中武雄市役所を訪ねました。以下、大敬君のレポートを紹介します。

武雄市役所訪問レポート

H.23.7.6 梶原大敬

7月6日、有田の観光について考える会、有田創生会で武雄市役所を訪問した。9時半頃市役所に到着。市役所1階ロビーでは、これから会う予定の樋渡市長がテレビの取材を受けておられた。

10時より会合開始。メンバーは有田創生会、武雄市役所側は樋渡市長、森部長、溝上課長他2名の合計10名。最初に有田側から一人ずつ自己紹介をした。

社長より、個人的に交流のあられる岩手県陸前高田市の被災された八木澤商店の話を読めると、樋渡市長は「その商品を市のお中元にしましょう」と、即決された。この決断の速さには大変驚いた。その後、徳永社長より今回の会合の主題である、有田町の観光事業についての説明がなされた。

その後樋渡市長より、「有田町と組むというよりは、魅力ある会社、魅力ある人と組み、結果的に有田町と組んでいた、という事になれば理想的だ。」というお話をされた。市長によると武雄市は全国的にはまだまだ知名度が低く、東京で武雄といっても誰もわからないが、有田や伊万里は東京はもちろんの事、ヨーロッパの人にも知られていて、世界的なブランドであるという事だった。そういう意味でも有田とは是非一緒に何かやりたいという事だった。

市長は徳永さんのプレゼンを聞いて、その話はカンボジアのシムリアップにある※アーティザン・アンコールとよく似ている、という話をされ、是非現地を訪れた方が良いという事だった。こういう例がすぐに出てくる市長の知識の豊富さに大変驚いた。

※アーティザン・アンコールはフランス外務省、EUの主導でできた職業訓練開発、その後の展示販売までを含めたプロジェクトで、品物の品質や展示、サービスもしっかりしていて評判が良い。日本の三越でもこの商品を取り扱っている。

また京都にある生カステラで有名な「然花抄院」という店や、広島尾道のワッフルが有名な店も参考にしてみても、という事を言われていた。市長はどちらの店にも実際に足を運んだそうだ。

そして人を呼び込みたいのであれば、まずは女性の気持ちを掴まなければならない、と言われた。人が入っている店や場所は、どこも女性が多いという事を言われた。

市長によると、自分は凡人なので何をするにも、何かを真似ているという事だった。例えば喋り方は大阪の橋本知事、武雄市についても大分の由布院市を真似したいとの事だった。その由布院市はドイツのバーデンバーデンという町を参考にしているようだ。

観光について言えば、押しつけがましい仕掛けではなく、人が自然とその場所に行きたくなるような付加価値を付ける事が大事だと言われた。また何か見たいものや、面白そうなものがあると、交通に不便な土地であっても、人は行きたくなるとの事だった。

また観光と食を絡める事は重要だと言われた。例えば最近ではサマータイム(仕事の時間を早める事)の導入などにより、朝食が注目されているとの事だ。そこで有田焼と絡めた朝食を作り、有名なランナーを呼んでのジョギングと組み合わせてみてはどうか、という企画も提案された。

また徳永さんには、プレゼンではわかりやすい言葉を選び、できるだけ短くした方が伝わりやすい、という事を言われた。また人に何か説明するには、言っている事の10倍の知識を持って挑まないといけないという話もされた。市長は毎月10万円分の本を買って読んでいるそうだ。

また最近の話題でいけば武雄市にも大規模な太陽光発電パネルを設置する予定があるらしく、何か有田焼とこのパネルを組み合わせたりできないだろうか、という提案をされた。

1時間で終わる予定だった会合は、予定を10分ほど上回り終了。最後に市長自ら市役所内を案内していただいた。職員の方々は平均年齢が40前後で若く、とても活気を感じた。またソフバンクからや、新潟県の燕三条から出向されている方もおられた。

武雄市役所といえば全国でも珍しい課が多くあり、例えば佐賀のがばいばあちゃん課やフェイスブック課等がある。スタッフの考えた面白い意見やアイデアは、積極的にどんどん取り入れているらしい。良い意味で一般的な役場とは空気が違っているように感じた。

また帰り際に、森部長様から樋渡市長が一般の方の来訪で、ここまで話を聞いてくれることは珍しい、との事。また武雄市役所でも何かできる事があれば応援するので、また訪問して欲しいとおっしゃられた。

最後に丁寧に御礼をし市役所を後にした。今回の訪問は会にとっても、個人的にも得るものが大きかった。忙しい中、私達の為に時間を割いてくださった樋渡市長を始め、市役所の皆さんには大変感謝している。今回の訪問で得たものを、積極的に今後の活動に活かしていきたいと思う。



有田焼創業 400 年事業で私が取り組みたいこと

有田は磁器発祥の地でもあるが、産業発祥の地でもある。高名な陶芸家を除いてほとんどの窯が分業制で成り立っている。特に工と商が共生し輝かしい有田の歴史を作ってきた。ここにきて経済津波のように襲い掛かった消費不況を、私たちの知恵と行動で乗り切っていかなければいけない。

工に置いては職人集団をまとめていく窯焼きのおやじの器量に左右する。人のしない事に果敢に挑戦する気概とゆるぎない哲学や理念に支えられている。特に職人さんのやる気を生み出す環境と匠の象徴である認定工芸士を育てる責務がある。

一方商においては、消費が低迷してくると安直に安物志向へ流れていく。有田は文化産業であり、癒し産業であるから、より付加価値を高めていかなければならない。難しい選択を余儀なくされる。付加価値とは窯の細かい工程の紹介であり、高名な作家の成功物語であり、400年の歴史、やきものの様式美など有田自慢をいかに発信できるかである。作り手に認定伝統工芸士の資格があるように売り手にも認定伝統販売士制度を設けたい。そして有田焼カリスマ営業マンとして自他共に認める制度が出来ればと思う。

400年事業は1にも2にも有田焼業界の復興であり、確かな自信と誇りを取り戻す事であろう。販売なくして生産なしと言われる。先ず売る力を強力に推進し、有田の枠にとどまらず県境を越えて4市2町にまたがる肥前窯業圏へ情報を共有する事であろう。今こそ肥前はひとつ運動を展開していかなければ、個々の窯焼きと商社では何も生まれないと断言できる。白磁発祥の地有田、産業発祥の地有田の名声は、日本初400年も続いた近世の歴史の1ページにふさわしい国家プロジェクトへ昇格させる事も可能だ。また、全国縦断大有田焼展の復活である。タイトルは、「ふりかえれば未来」とする。400年を契機に全国いや世界に発信しない手はない。



有田内山の町並み（重要伝統的建造物群保存地区）